

幡枝古墳群（2号墳）発掘調査

現地説明会資料 1988.10.02

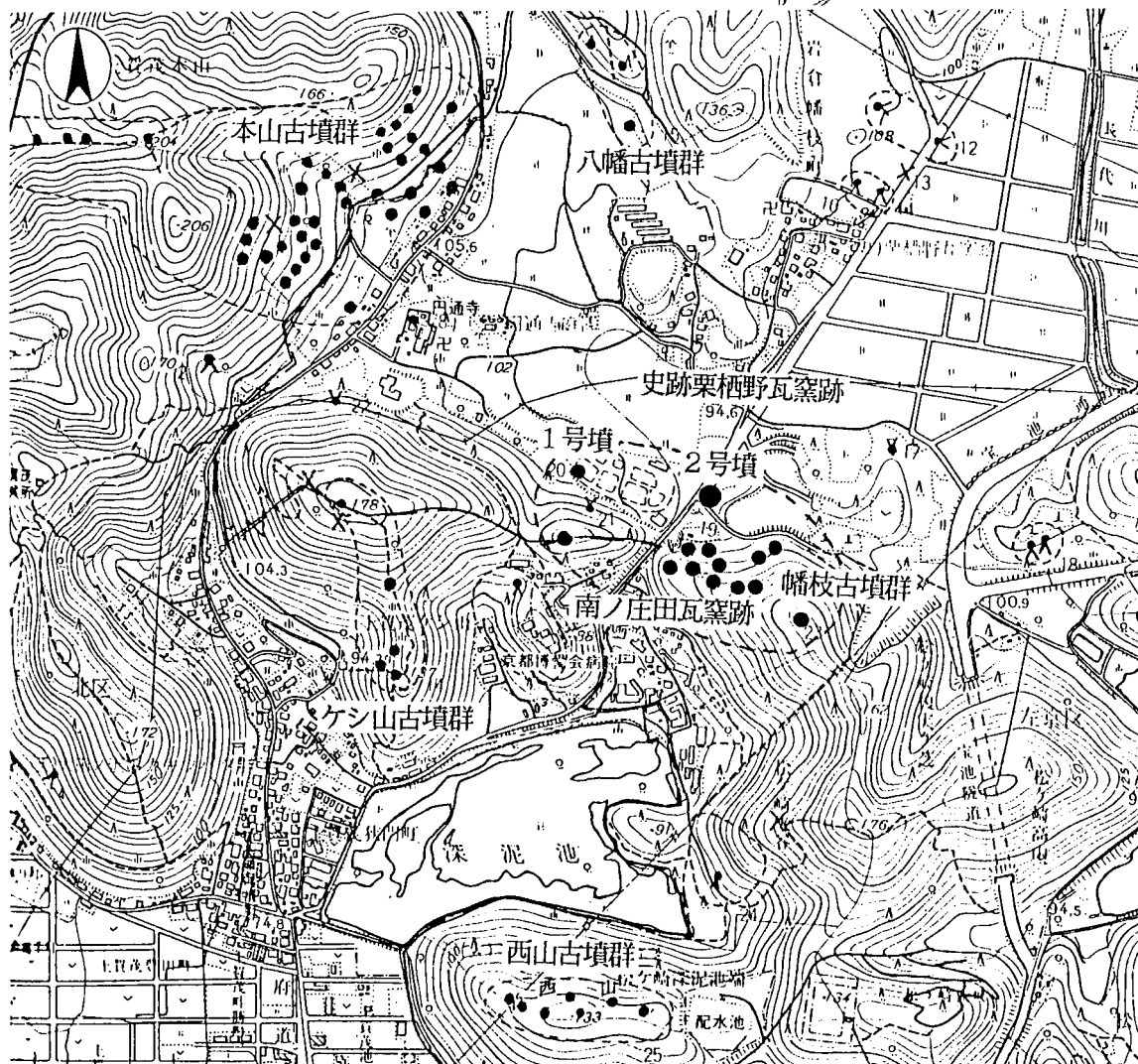
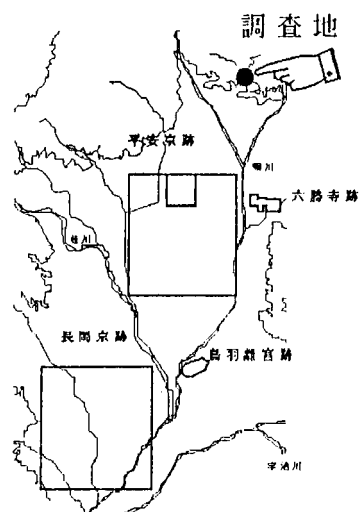
調査古墳：幡枝古墳群（2号墳）

所在地：京都市左京区岩倉幡枝町

調査期間：1988年7月19日～継続中

調査面積：約200㎡

調査主体：（財）京都市埋蔵文化財研究所



第1図 調査位置図 (1:10,000 『京都府遺跡地図 1972』一部加筆)

1 はじめに

当該調査地は、「幡枝古墳群」・「南ノ庄田瓦窯跡」に位置しています。ここでは、この度実施しました「幡枝古墳群（2号墳）」について報告します。

発掘調査は、1988年7月19日より始めました。墳丘上には最近までの盛土がたくさんあり、人力でこれを排除したあと、墳丘・主体部の調査を進めました。

調査の結果、墳丘は完全に残っており、斜面には葺石がめぐることが明らかになりました。また、主体部については当初の予想に反して、木棺をそのまま墳丘に埋めたものであることが判明しました。そして、木棺内からは鉄剣・鉄刀が、墳丘上からは須恵器がたくさん出土しました。

2 調査の成果

現在までのところ、墳丘・主体部・出土遺物については、以下の点が明らかとなっています。

- 墳丘
- ① 墳形は円墳で、直径約12m、高さ約2.4m(周溝底部から)の規模をもっています。
 - ② 墳丘はすべて人工の盛土で造られ、盛土の高さは約2.0mあります。
 - ③ 墳丘の斜面下半には葺石が葺かれています。特に裾の部分には大き目の自然石が整然と並べられており、墳丘の裾を明示しています。
- 主体部
- ① 木棺を直葬したもので、墳丘の中央東よりに2基並んで造られています。
 - ② 東側の棺(東棺)は、長さ3.0m、幅0.65m、深さ0.6mの規模をもち、長さ約4.2m、幅約1.6mの掘形の中に造られています。
 - ③ 西側の棺(西棺)は、長さ3.20m、幅0.6m、深さ0.4mの規模をもち、長さ約4.0m、幅約1.2mの掘形の中に造

られています。東棺に比べて浅いことが特色です。

- ④ 墳丘の西半分には、攪乱墳があります。しかし、ここには埋葬施設は見つかっていません。

出土遺物 ① 須恵器がたくさん出土しています。杯・蓋・高杯・壺・甕・甌^{つき ふた たかつき つば かも はろう}などがあります。これらは墳丘上に供献された土器群とみられます。

- ② 2つの主体部からは鉄器が出土しています。東棺からは鉄剣が2振と挂甲けいかうのこさ小札が、西棺からは鉄剣・鉄刀がそれぞれ1振ずつ出土しています。

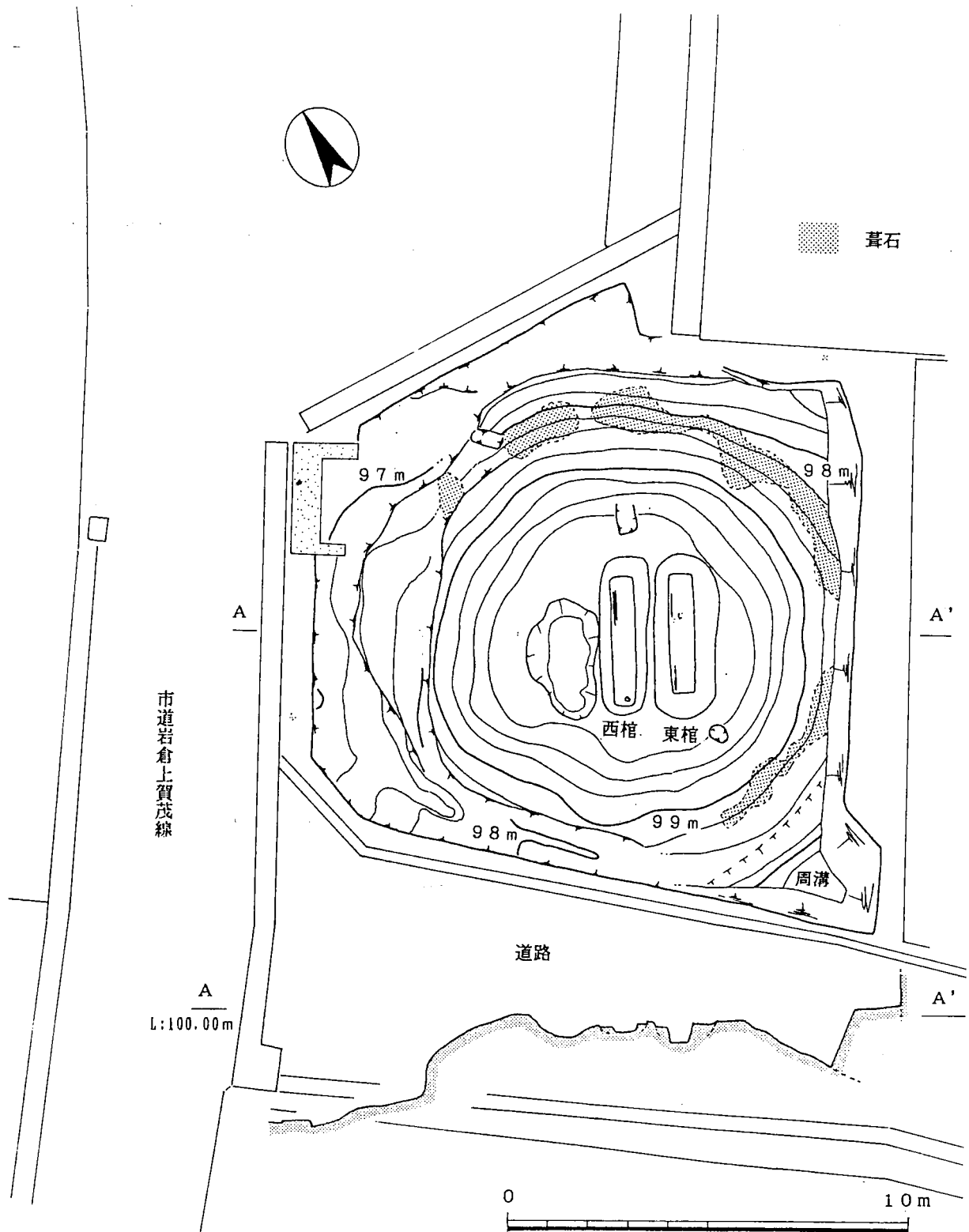
この他主体部を検出した面から、鉄鏃てつそくと鎌が出土しています。

- ③ 古墳に直接関係ない遺物として、多量の瓦と、鴟尾しびが1点出土しています。また、窯壁の破片も出土していることから、付近に瓦窯があったと思われます。

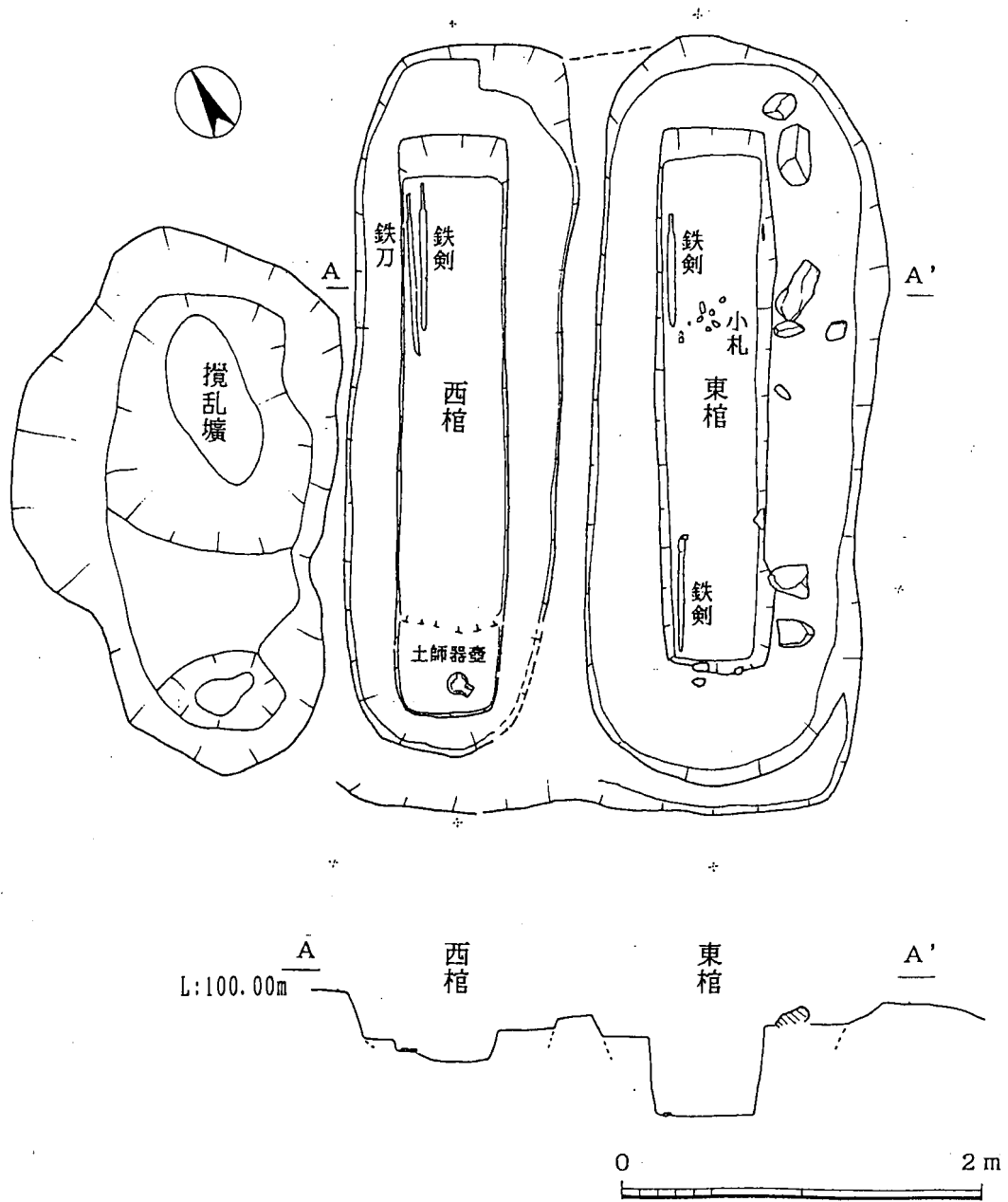
3 まとめ

この調査は岩倉盆地の古墳としては初めての本格的な発掘調査となりました。その結果、京都市内では類例の少ない木棺直葬墳であることが判明し、出土した須恵器の年代から、5世紀後半に造られたことがわかりました。この時期の古墳は京都市内では調査例がないだけに、本例は貴重な例となりました。

実のところ、京都市内で知られている小規模な古墳群（群集墳）は、多くが6世紀後半～7世紀前半代のものです。ところが、岩倉盆地、特に幡枝にある古墳群は断片的ながら、6世紀でも前半代の古墳群があることがわかっています。なぜ岩倉盆地の古墳に時期の古いものが多いのか、京都市の市街地側には果たしてこのような古墳群はないのか、などといった不明な点がたくさんあります。こうした意味で、今回の調査は、群集墳と呼ばれる小規模な古墳群が京都盆地でどのように展開していったのか、という問題を考える上で非常に重要な調査であったといえます。



第2図 古墳測量図 (1:150)



第3図 主体部実測図 (1:40)

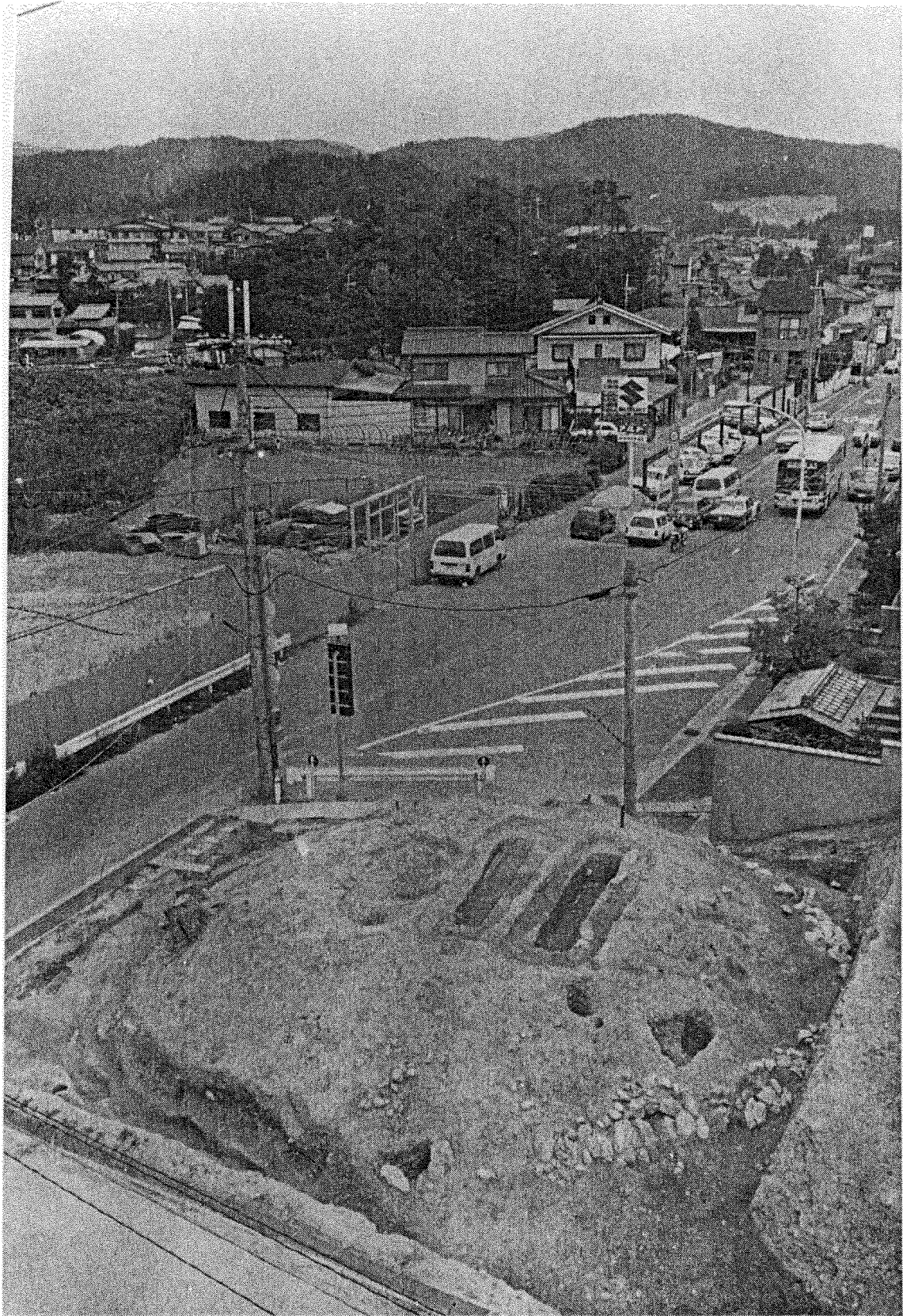


写真1 古墳全景（南から）



写真2 墳丘と葺石（北東から）

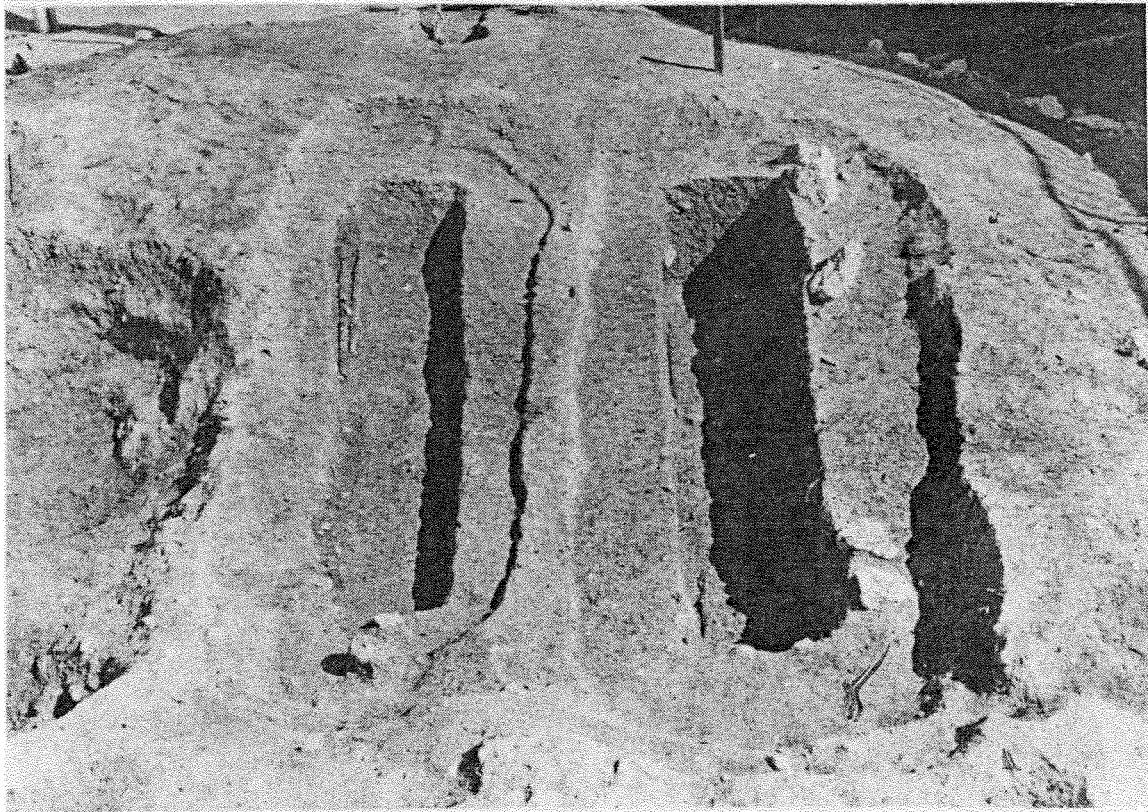


写真3 主体部全景（左が西棺、右が東棺、南西から）